

名前からわかる家系



「但馬牛の故郷地図」作りに励む小玉学芸員

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

但馬牛の種雄牛は、いわゆるタネウシは、家系や父牛がわかる名前を付けるのが慣例になっている。一般に種雄牛は父から息子へと続く父系を家系とする。但馬牛の家系には旧美方郡を起源とする中土井系、熊波系と旧城崎郡に発する城一系、

当館の学芸員、小玉さんは「但馬牛の故郷地図」作りに取り組んでいる。そもそも、「但馬牛は、但馬のどのあたりの牛が基になつてできたの?」という来館者の問い合わせに、一目で応えられる展示を作りたいというのが動機だった。しかし作業を始めるきっかけになつたのは、「牛の名前の付け方」という別の話だった。

但馬牛の種雄牛、いわゆるタネウシは、家系や父牛がわかる名前を付けるのが慣例になっている。

勘定の末尾に「土井」をつけ、熊波父系の牛は「××波」と「波」を付ける。城崎系の牛は名前の頭に「城」や「奥」、「勘」を付ける。また中土井系や熊波系の「〇〇」、「××」の部分には、父親の名から一字取って付けるので、名前で家系と父親がわかる。昭和の初め頃までは、生産農家や生まれた村の名を付けた習慣もあった。

小代の田尻松藏氏がつくった牛だから、その名は生産者に由来する。また「田尻」の父親「第十四茅野」は、出生地の小代区茅野に由来する。ちなみに「第十四茅野」の「十四」は「茅野」の名を持つ14番目の種雄牛という意味だ。雌は1年に1頭しか子供を

産まないが、雄はタネウシとして多くの子牛を残す。これにより雄は良きにつけ、悪しきにつけ子孫に及ぼす影響は大きい。

兵庫県は明治18年に、種雄牛は県や郡、市町村、畜産組合などが管理することにして、体形や発育、性質を検査して、

合格した牛だけを種雄牛にする規則を定めた。結果、種雄牛は選び抜かれたエリートとしての地位を得て、種雄牛生産は農家の誉、村の誇りとなつた。こうしたことから生産

牛は選ばれたエリートと

しての地位を得て、種雄牛生

産は農家の誉、村の誇りとなつた。こうしたことから生産

牛は選ばれたエリートと

しての地位を得て、種雄牛生